

地域ブランドの創生を目指した 酒類卸売業の自社ブランド商品開発支援

支援の ポイント

- ①多くの支援機関・支援人材を編成した多機能型プロジェクトの運営
- ②地元支援機関による粘り強い経営者対応
- ③地域ブランド【信州わざ匠】の立ち上げと県と連携したPR活動

支援の経緯

平成23年6月、長野県で開催される技能五輪・アビリンピック2012に向けて、地域ブランド創生を考えた商品開発セミナーが開催された。主催は長野県技能五輪推進事務局で、講師陣にネットワークアドバイザーの小口芳久氏が参画した。技能五輪の波及効果で県内経済の活性化につながる商品づくりを講演テーマとして、【長野技能五輪・アビリンピック大会2012開催記念商品】へ参画するよう受講者に提案した。関心を示したのは、岡谷商工会議所、塩尻商工会議所、八十二銀行などの支援機関で、地元の支援先企業の商品開発支援に小口アドバイザーが参画するように依頼があり、調整のうえ3社の新商品を【長野技能五輪・アビリンピック大会2012開催記念商品】として支援することとなった。

支援先企業の1社は、岡谷市で酒類卸売業を営む創業80年の老舗企業である。経営者は低迷する酒類販売の打開には、卸売業としての自社ブランド商品の開発が突破口になると考えていた。取引のある八十二銀行に新事業展開支援の相談をしていたところ小口アドバイザーを紹介され、酒卸売の自社ブランド商品開発に本格的に取り組む意思を固めた。

支援のプロセス

八十二銀行から支援依頼を受けた小口アドバイザーは、旧知の経営指導員である岡谷商工会議所杉本相談所長に、支援先企業について問い合わせをした。同社は日本酒需要の衰退とともに売り上げが減少し苦しい経営が続いていた。一方で、岡谷商工会議所の青年部長として長年活動し、岡谷市の地域経済を考える行動派の人物との評であった。かつて、製糸業で繁栄した長野県岡谷市も、現在では他の地方都市と同様、産業の衰退による人口減少が進み、地域経済活性化のきっかけを必要としていた。岡谷商工会議所も地元企業のオリジナル商品開発の支援を重点課題としており、是非一緒に支援したいとの意向を示した。

小口アドバイザーの支援の第一歩は目利きにある。経営者と時間をかけた面談で状況を把握し、有望であると感じた事業・商品には、多くの支援機関を巻き込んで、フリーディスカッションを通し支援計画をまとめていく。今回の企業支援も、八十二銀行、岡谷商工会議所に加え、長野県地域資源開発支援センター、長野県産業振興センター（松本事務所、木曾事務所）に参画いただき、小規模酒造メーカーと取引する地元卸売業の独自ブランド商品を開発するプロジェクトを立ち上げた。



<プロジェクト検討会の様子>

プロジェクトでは、商品開発の基本戦略を議論し「技能五輪をテストマーケティングの場として活用し、限定販売を行い、その中で人気の商品を絞り込み、本格展開する」ストーリーとした。当初、県の専門家派遣制度を活用し、商品開発の専門家に企画の立案を依頼した。専門家は、他県で人気の商品を参考に、薬箱に酒をセットし大吟醸が1,000円で購入できる商品企画を提示してきた。これを原案として、プロジェクトメンバーで議論を繰り返し、支援先企業独自の商品コンセプトを構築していった。

小口アドバイザーがこだわったのは、地元酒造メーカーと取引する卸売業の特徴を如何に訴求するかであった。熟考の末、「桐箱に、300mlの角瓶を3本、酒蔵の異なる日本酒をセットし、3,000円以下で商品化」という結論に至った。しかし、斬新な企画であったために、しばらく支援先企業が付いて来られなかった。「桐箱は高価だ」「日本酒に角瓶は合わない」「日本酒用の角瓶はない。あっても高い」などを理由に二の足を踏んでいた。ここで活躍したのが岡谷商工会議所の杉本相談所長であった。杉本相談所長は支援先企業を頻りに訪れ、経営者と面談を繰り返した。日本酒が一升瓶では売れない時代に入中、新しい顧客層に、新しい販売方法で、新しい日本酒の楽しみ方を提供しようとする取り組みへの理解と行動を促した。経営者と杉本所長が熱い想いをぶつけ合い、課題解決は1歩ずつ前進していった。

酒造メーカーとの開発協議は、同社経営者と岡谷商工会議所が当たった。商品名とラベルデザインは専門家派遣した川上デザイナーと長野県地域資源製品開発センターが担当し、セット商品名を【諏訪の宝箱】とした。この間、通信販売も想定してホームページ見直しのためにネットワーク事業からIT専門家を派遣している。



<諏訪の宝箱・青3本ギフト>

フォローアップ活動

24年7月、技能五輪・アピリンピック大会2012開催記念商品【諏訪の宝箱】は完成した。小口アドバイザーは、技能五輪後の販売戦略を勘案し、岡谷・塩尻地区の新しい地域ブランドの企画を地域資源製品開発支援センターに依頼した。間もなく、【信州わざ匠】という地域ブランドとオリジナルラベルが誕生した。同ブランドが推奨するのは、【諏訪の宝箱】の他に岡谷、塩尻の伝統技術を搭載した新形態の商品シリーズ2件である。9月に長野県商工労働部と連携したプレスリリースを行い、TV局、新聞社等に【信州わざ匠】推奨商品として紹介されている。

また、支援商品は一部先行して、諏訪市内の居酒屋で飲食客向けに販売されており、人気の商品になっている。【諏訪の宝箱】と並行開発した「大吟醸300ml丸瓶入り・飲みきりボトル」である。ホームページからの通信販売も立ち上がり、既存のルート販売との相乗効果が期待されている。

OJTについて

今回の支援でOJTが意識されたのは、岡谷商工会議所が支援の主体となった24年4月以降であった。岡谷商工会議所杉本相談所長と小口アドバイザーは、支援業務の役割を分担する関係にあった。商品開発の会合は小口アドバイザーが進行役を担い、作業課題を調整したり、支援先企業や支援機関に宿題を出したりとプロジェクトマネジャー役を担っている。杉本所長は、会合以外の場では、経営者と膝付け合せ、具体的な業務の進め方や経営者の相談対応に努めた。小口アドバイザーからの指示は丁寧に経営者に伝え、従業員のモチベーション維持も図った。杉本所長は、「企業経営者と経営指導員が1対1で対峙することはあるが、商工会議所がプロジェクトチームを編成する機会はない。プロジェクトチームに参画することで、視野が広がり、実行支援が加速していくことを実感した。」と振り返る。自らは、小口アドバイザーの手法を学びながらも、部下の3名の経営指導員へのノウハウ移転にも取り組み、相談所全員の能力向上に努めた。



<地域ブランド【信州わざ匠】のラベル>